

アメリカのホロコースト教育

—素描—

田 江 安 廣

(2000年10月15日 受理)

Holocaust Education in the US: A Sketch

TAE Yasuhiro

ホロコースト（ショアー）は20世紀の文明圏で生じた最も深刻な出来事の一つであるが故に、それが人間存在にとって、それぞれの国にとって、西欧文明にとって意味するものの探求は今日もつづいている。その具体的なあらわれが諸国に見られる博物館、記念碑、ホロコースト研究・教育組織（ホロコースト学会）、ホロコースト教育、おびただしい数の出版物、websites、ビデオである。本論では2000年1月26日から28日にかけて開催されたストックホルム世界ホロコースト・フォーラム The Stockholm International Forum on the Holocaust を出発点として、アメリカのホロコースト教育の素描を試みる。¹⁾

I

ストックホルム世界ホロコースト・フォーラムの契機はスウェーデンの首相 Göran Persson が世界の政府首脳、専門家、研究者、生存者によびかけ、フォーラムを開催したことに始まる。しかしその背景として、1998年5月に英国首相トニー・ブレア、合衆国大使領ビル・クリントン、スウェーデン首相 Persson 三氏が Task Force を設立し、「ホロコースト教育」、「記憶」(remembrance)、「研究」を国際的な協力のもとに促進することに同意したことを見落としてはならない。それ以降、フランス、ドイツ、イスラエル、イタリア、ポーランド、オランダが参加、1998年ワシントンの会議ではこれら諸国は共同宣言を採択した。その趣旨は親、教師、および政治、宗教その他の指導者にホロコースト教育を奨励し、ホロコーストの記憶化を促すというものである。

このフォーラムで提起された基本的な事項は1)我々はホロコーストから何を学び、またこれらの出来事を研究することが人種差別、反ユダヤ主義、人種間のあつれき、その他の憎しみや差別に対して警鐘となりうるか。2)政治家、共同体はいかにしてホロコースト教育、記憶化を支えるかが主たるものである。

45ヶ国が招待されたこのフォーラムの成果はストックホルムホロコースト・フォーラム宣言とし

て採択された。それは8項目にわたって述べられている。1)ホロコーストは文明の基盤への挑戦である。類をみないホロコーストの性格は常に普遍的意味を有する。ナチの犠牲者の恐るべき苦しみはヨーロッパ全土にわたっていやしがたい傷を残した。2)ナチによって計画され、遂行されたホロコーストは我々の共有の記憶 (collective memory) にとどめおかねばならない。ナチを拒絶し、犠牲者を守り、時には命さえ失った人々 (rescuers) も記憶されねばならない。恐怖、ヒロイズムは我々の善と悪への理解の指標 (touchstone) である。3) ジェノサイド、民族浄化、人種差別、反ユダヤ主義、外国人排斥によって人類が未だ傷を負い続けているとき、世界はこれらの悪に対して厳粛な責任を有する。我々は人民の道徳的コミット、政府の政治的参加を強化し、未来の世代がホロコーストの原因を理解し、その影響を考察するよう努めねばならない。4)我々はホロコースト教育、記憶、研究をすでに数多く行った国々においても、この努力に参加する国々においても、奨励する。5)我々はあらゆる次元においてホロコーストの研究を奨励する。学校、大学、共同体においてホロコースト研究を奨励する。6)我々はホロコーストの犠牲者を記憶し、それに反抗した人々を記憶にとどめようとする。毎年の Day of Holocaust Remembrance を含め、ふさわしいかたちでのホロコースト記憶化を奨励する。7)我々は未だ定めがたいホロコーストの影に光をあてようと試みる。ホロコーストに関わるあらゆる文書が研究者の手に入るよう、文書 (archives) の開示のための必要な努力を行う。8)新しい世紀を迎えるにあたって、この大きな国際フォーラムでつらい過去の土壌によりよい未来への種子を植えつけるための努力を行うことはきわめてふさわしい。我々は犠牲者の苦しみに思いをいたし、犠牲者の苦悩から靈感をひき出す。我々は抹殺された犠牲者を記憶し、我々と共にある生存者を敬い、相互理解と正義への人類の共通の希求を再確認する。

ストックホルム宣言を一つの言葉で要約するとすればそれは「記憶」になると思われる。現在は過去によって規定されると同時に過去は現在によって解釈され意味づけされる。過去は現在の状況によってその意味合いを変えてゆく。ホロコーストが人類に永遠の教訓を与え、共有の記憶にとどめる必要性が強調されるようになった背景にはホロコースト生存者が急速になくなりつつあること、変わらないホロコースト否定者の存在、戦後年数がたつて以前より冷静にホロコーストを考えられるようになったこと、世界の種々の政治的要因などが考えられる。あと100年、200年後にホロコーストはどのようにとらえられ、意味づけされるのであろうか。いずれにせよホロコーストは制度化、歴史化、政治化の方向に向かっている。

ホロコーストがキリスト教文明の失敗であるという指摘は生存者のエリー・ヴィーゼンによってなされてきた。これに応じキリスト教徒としてカーガス Harry James Cargus, ルーテル Franklin Littell, ロス John Roth, リトナー Carrol Rittner らによってホロコーストがキリスト教徒にとって持つ意味、ホロコースト以降のキリスト教の在り方が論じられてきた。例えば神学者ボンホファーの知人であった Littell はホロコーストによって深刻な衝撃を受け、ホロコーストは犠牲者にとっての悲劇であるのみならず、キリスト教徒にとっても大きな悲劇であったとして1970年にもっとも古いホロコースト研究学会のひとつを設立し²⁾、ホロコースト教育に取り組んできた。

キリスト教とユダヤ教の対話の試み *Interfaith* も行われている。ホロコーストのユニークさと普遍性という点については繰り返し論じられてきたがノヴィック Peter Novick はホロコーストをユニークな歴史上の出来事であると捕える見方はだんだん弱まりつつあると指摘する。彼によればこの捕え方はヴィーゼルの影響が大きい。この点が合衆国のホロコースト記念博物館の設立にあたって大きな争点の一つであった。博物館建設までの経緯についてはヴィーゼルの自伝に詳しいが、ヤング James Young はその著書の中でカーター前大統領が合衆国にホロコースト記念博物館を設立する理由としてアメリカの行ったサウジアラビアへの武器輸出に対するイスラエルの怒りを静めるという政治的背景の他に 1) 合衆国軍が多くの収容所を解放し、アメリカに多くのホロコーストの生存者が暮らしていること。2) ホロコーストの時期にアメリカがその事実を充分認めようとしなかった責任があること。3) ホロコーストが普遍性を有することを挙げている。³⁾ 政治への関わりに慎重であったがヴィーゼルは博物館設立のために力を尽くすよう大統領から依頼を受け、最終的には承諾した。彼はホロコーストのユニークさのなかに普遍性があると信じ、つぎのように述べている。「私はいつもホロコーストが歴史におけるユニークな出来事だと信じてきたし、いまでも信じている。それは私にとって普遍的な含意と適用可能性をもつユダヤ人にとっての悲劇である。その普遍性はユニークさのなかに存在する。」⁴⁾ すべての歴史上の出来事はユニークであるとしてホロコーストのみをユニークとする見方に反対する立場があり、ホロコーストをユニークとする見方はホロコーストを絶対化し歴史の外に押しやってしまう危険性があるとして反対する人々がある。すなわち比較不可能、理解不可能、表徴不可能とする前提がそこには存在しているからである。バウアー Yehuda Bauer はユニークという言葉を廃し「前例のない」"unprecedented"を用いるようになった。

上記の宣言のなかで重要な点の一つは救出者への言及である。ホロコーストのなかに救いの精神や過度のヒロイズムを見いだそうとする傾向がホロコーストの現実をみすえていないとして批判されるのはホロコーストが徹底的な破壊だったからである。しかしながら自ら命を危険にさらし、ときには家族を危険にさらしながらもユダヤ人をかくまい続けた人々がいたことを無視することはたとえこれらの人々が例外的であってもホロコーストの一面に目をつぶることになる。ワイドナー John Weidner は妹を殺され、自らはとらえられて拷問をうけ、言葉に支障をきたすようになっても救助活動をやめなかった。⁵⁾ Joop Woortman はとらえられて収容所に送られなくなった。Louisa Steenstra は夫婦でユダヤ人をかくまったため夫の耳がシェパードからかみちぎられ、ナチに殺害されるところを見なくてはならなかった。Ivan Vranetic は17歳のとき少女を腰まで積もった雪からまもるため両肩にのせて10キロの道程を歩いた。在フランスのポルトガル大使メンデス Aristides Mendes は政府の禁止後も1万のビザを発行したため本国に召還され、職を奪われ貧窮院で生涯をとじた。フランスでは90%がペタンを支持したが、連合軍が優勢になると90%がドゴール支持に鞍替えしたとされる。権力を恐れ、権力にこびる人々とこれら救出者の違いはどこから生じるのであろうか。大多数の人々がナチに協力あるいは傍観していたなかで、日々絶えざる不安とおびえの

なかにありながら、何年にもわたって最後まで迫害された人々、子供たちを守ろうとした人々の存在を知ることは決して無駄ではない。なにより興味深いのは何故あのような行動をとったのかを問われたとき多くの救出者は答えることが出来ないことである。それが彼らには自然であり、当然であり、そういう問い自体が彼らには不自然なのである。ヒーローと呼ばれることに彼らは強い当惑をおぼえる。しかし、ここで忘れてはならないことは生きのびるために名前、出自の変更を余儀なくされ、かくまわれた子供たちの多くは、アイデンティティーの問題に苦しみつづけたことである。あなたの名前はサラじゃなくメアリーなのよ、あなたは決してユダヤ人じゃないし、ユダヤ人だったこともなかったのよといわれた子供たちの当惑はどれほどだったであろうか。ある少年は生きのびるためにユダヤ人のアイデンティティーを捨て、キリスト教徒にならねばならなかった。その夜、彼は夢を見る。夢の中で彼は平原に立ち、むこうに大きな山が見える。すると突然、山が神となり、神は大きな剣をふりあげ、少年を真二つに切り裂くのである。

ホロコースト研究機関、教育機関はシュルマン W. Shulman 氏編集のガイドによればアルゼンチン、オーストラリア、カナダ、チェコ、フランス、ドイツ、イスラエル、イタリー、リトアニア、ロシア、南アフリカ、スウェーデン、ウクライナ、英国、アメリカ、日本に存在し⁶⁾、またショート G. Short, サプル C. Supple 他が編集した『学校のカリキュラムにおけるホロコースト—ヨーロッパの展望』*The Holocaust in the School Curriculum: A European Perspective*⁷⁾には他にベルギー、デンマーク、オランダ、スペインその他の教育機関が挙げられている。この中でもアメリカにおけるホロコースト教育は近年、沸点に達したかの観がある。1993年に連邦法によって設立された合衆国ホロコースト記念博物館 (USHMM) をはじめとする数多くの博物館、さらに100をこえる研究・教育組織、圧倒的な数の websites はそれを雄弁に物語っている。そこで、ホロコーストがアメリカでいかに大衆に意識化されるに至ったかをリップスタット D. Lipstadt の「アメリカとホロコーストの記憶—1950-1965」“*America and the Memory of the Holocaust*,” ノヴィック P. Novick の『アメリカの生活におけるホロコースト』*The Holocaust in American Life* を主たる手がかりとしてホロコーストに対するアメリカでの意識化の素描を以下、試みる。⁸⁾

II

ホロコーストが20世紀の主たるシンボルの一つ、特にアメリカのユダヤ人にとってそうであるのは論をまたない。リップスタットによればそれは良きにつけ、悪しきにつけユダヤ人のアイデンティティを形成する大きな要因である。1950年代には今日と異なりホロコーストについての大学でのコースは存在せず、40年代、50年代にアメリカに逃れてきた生存者は彼らの体験を語ろうにも、彼らの話に耳を傾ける人は少なかった。生存者自身もアメリカの生活に慣れ、未来に向けて生活を築くことを求められた。ホロコーストについての情報が全くなかったわけではないにもかかわらず、それがアメリカ人に与えた影響がきわめて限られたいたのは注目に値するとリップスタットは述べ

ている。

初期にアメリカ人に影響を与えたものがあるとすれば『アンネ・フランクの日記』であり、ウィリアム・シャイラーの『第三帝国の興隆と滅亡』である。またキャサリン・A. ポーターの『愚者の船』はユダヤ人に対するドイツ人の態度を描き、1961年のアイヒマン裁判の翌年、7冊の本が現れた。しかしながら、リップスタットによれば当時のアメリカのユダヤ人はホロコーストにもイスラエルに関心は薄かった。雑誌コメンタリーのシンポジウムでの31名の参加者のうち2名のみが彼らの人生に影響を与えたものとしてホロコーストをあげ、雑誌ジュディズムのシンポジウムの参加者21名中、ホロコーストに関心を払う者は一人もいなかった。

この原因はどこに求められるであろうか。リップスタットは三つの要因を挙げている。まず第一に楽観的精神“can-do” optimistic spirit がアメリカにゆきわたっていたことが挙げられる。戦争から帰ってきた人々の過去の恐怖に満ちた話は友人や家族から敬遠され、戦後の景気にわくアメリカでは苦痛に満ちた過去に焦点をあてるにはふさわしい時期と思われなかった。ホロコーストは他国で他の人々に対して行われた他国の出来事である。アメリカ人に何の関わりがあるであろうかというのである。第二の要因は政治的なものである。戦後アメリカにソ連という新しい敵があらわれた。ソ連と対峙するにはドイツの過去に批判的態度をとるより、友好的態度をとる方が得策と思われた。アメリカの政治家、軍指導者がソ連を宿敵、平和への脅威と見なしはじめたとき、ドイツとの宥和策がより望ましいと思われたのである。無論ユダヤ人はこれを歓迎したわけではないが自らを共産主義と見なされたくないという心理的内圧、外圧から、目立った行動に出ることはむずかしかった。

第三の要因としてリップスタットが挙げているのはローゼンパーク事件である。ユダヤ人コミュニティはユダヤ人がローゼンパークのような「裏切り者」と同一視されることを恐れ、ローゼンパーク支持者、左翼を批判した。ドイツの過去を正面から批判できる風土ではなかった。沈黙がよりふさわしい方策であった。ドイツを共産主義の敵と見なし、民主主義の擁護者とする視点は1950年代ずっとつづいたとリップスタットは見ている。

そのような折、シャイラーの『第三帝国』が世に出た。この本の成功はどこに求められるべきであろうか。出版社はアメリカ人は過去に興味を持たないとして彼の本の出版は二度拒絶されたが、(1954年、1955年)一度、世に出るや出版社の読みが外れていることが明らかとなった。『第三帝国』は百万部以上売れ行きをのばしたのみならず、ベストセラー欄に一年以上居すわり続けた。この書の売れ行きが示すものはアメリカ大衆がある程度までドイツの過去の記憶と、それが問いかけるものに対峙する気持ちが高まったということが考えられる。と同時に、1950年代後半から60年にかけてドイツとアメリカの関係が“lowest point”に達した政治的背景があるとリップスタットは説明する。そのようなおりアイヒマンが逮捕され、裁判の様子が毎日のように報道された。ギャロップ調査によれば87%以上のアメリカ人が何らかのかたちで裁判について聞いたとされる。もっとも、これはゲーリー・クーパーの死のニュース93%には及ばなかった。

アイヒマン裁判後、アーレントの『イエルサレムのアイヒマン』*Eichmann in Jerusalem*が出版された。世論調査の示すところによればアイヒマン裁判もアーレントの本をめぐる論争もアメリカ人、特にユダヤ人の間にホロコーストに対する一貫した関心を維持するには至らなかった。リップスタットによれば裁判がアメリカ国民に対して果たした役割はアメリカを一つの大きな教室に変えたということである。ニュールンベルク裁判以来、ユダヤ人を絶滅しようとする試みがこれほど劇的なかたちで焦点をあびることはなかった。

アイヒマン裁判は長期的にはアメリカ人のホロコーストの意識化に向けての地ならし“laying the groundwork”となったのである。その後6日間戦争、ヨム・キプール戦争、ヴェトナム戦争を経てホロコーストへの意識化が強まったとされる。

ノヴィックの著書に触発され、『ホロコースト産業』*The Holocaust Industry*を書いたフィンケルスタイン Norman Finkelstein はホロコーストが実質上、アメリカの“fixture”となったのはアラブ-イスラエル戦争の勃発した1967年6月以降であったという。⁹⁾ 従来の解釈では戦争当初のイスラエルの孤立と弱さがナチによる絶滅の記憶を呼び覚ましたというものである。これにたいし、フィンケルスタインはイスラエルの孤立と弱さ、「第二のホロコースト」への恐れではなく戦争によって証明された強さ、アメリカとの戦略協力が1967年以降、フィンケルスタインのいう「ホロコースト産業」を加速したという。ここでフィンケルスタインはノヴィックを引用する。「合衆国がイスラエル支持にもっとも消極的であったのはホロコーストの記憶が生々しかった戦後25年であった。(中略) アメリカのイスラエル援助がしずくから洪水に変わったのはイスラエルが弱く、傷つきやすいと見なされた時期ではなく、イスラエルがその強さを証明した6日間戦争の後であった。」

ノヴィックはその著書の中で生存者(初期はDPとよばれ、次にrefugee、近年survivorと呼ばれるようになった)に対する戦争直後の態度と今日の態度の対照を“eerie symmetry”と呼んでいる。¹⁰⁾ 以前は生存者は体験を語ろうとしても耳を傾ける人がなかったが、今日では映画『ショーアー』の一場面に見られるように体験を語りたくなくとも、語らねばならないと説得される。ノヴィックはホロコーストが大衆に意識化されなかったのは、大衆の罪意識による心的抑圧によるものでなく、それが人々を当惑させるトピックであったこと、強者アメリカの風土の中で生存者が弱者と見られることを恐れたこと、さらに冷戦を大きな要因として挙げている。ホロコーストはナチの敗戦と共に終わり、今日のように永遠の教訓を人類に与えるものとしての地位を獲得していなかった。ホロコーストはヨーロッパでの出来事であった。一方核戦争はアメリカが犠牲者(又は加害者)に直接なりうる可能性をはらんでいた。冷戦はホロコーストを周縁へと押しやったのである。ノヴィックの論で特に関心をひくのはホロコーストへの意識がひとりでに次第に顕在化したのではなく、ホロコーストの意識化はユダヤ人指導者のそのおりの決断の結果である。しかしながら、選択の結果がホロコーストをユダヤ人の自己規定、非ユダヤ人によるユダヤ人理解の中核となることは、必ずしも予期しうるものではなかった。60年代、多くのユダヤ人がホロコーストを恥辱と感

じていると思われたとき、戦後の沈黙に当惑し、ホロコーストを直視するよう説いた人々が、今日では多くのユダヤ人がそれを誇らしげに思うようになったとき、同じく当惑することになるのである。¹¹⁾

ノヴィックの著書の最終章ではホロコーストは将来においても、その記憶化の在り方は変化する状況によって影響を受けつづけるであろうと述べている。その記憶化の在り方とは我々の行う選択に他ならないが、意図的であるにせよ、そうでないにせよ、状況は選択に影響を与えるではあろうが、我々は自らの選択に対して責任を有している。この著はこれらの選択により多くの情報を与え、より思慮深い選択が行われるようにとの希望をこめて書いたという言葉でしめくくられている。¹²⁾

III

アメリカ政府のホロコーストに対する態度の具現化は1980年議会条例で憲章化され1993年に設立されたホロコースト記念博物館に見られる。¹³⁾ アメリカの首都ワシントンに位置するこの博物館の使命は、1) ホロコーストという前例のない悲劇についての知識を推し進め、布及すること。2) 苦しみ抜いた人々の記憶を保持すること。3) 訪問者にホロコーストが投げかける直接的、精神的な問いについての考察を促し、民主主義に生きる市民の責任を認識することとある。具体的にそれらがどのようなかたちで行われるかといえば、1) 展示（筆者訪問中は“Flight and Rescue”の展示が行われていた）。2) 調査と出版。3) 種々の資料（evidence, art, artifacts）の収集。これについては資料の品質保持のための特別な倉庫があり、そこで新しく入手した資料の吟味も行われている。4) 教育のための資料、教師のための resource の供給。これは主に Education Resource Center が担当、そこでホロコースト教育に携わり、あるいはその意志のある教師のために教材、ビデオ等の学習、閲覧が可能である。また教育部門ではホロコースト教育の経験が浅い者のためには Belfar Conference が開かれ、教師は研修をつむことが出来、さらに経験を積んだものには Mandel Teacher Summer Institute が存在する。これは5～6日にわたる集中的な教師のための研修プログラムで、応募した全米の教師から25名前後が選ばれ、生存者の証言、スペシャリストの講義（本年は John Roth, James Young, Tim Cole 等）に参加し、多くの資料の配付をうける。このプログラムの参加者には“outreach project”という課題が与えられ、その計画の実践について報告が求められる。（この Mandel Institute には筆者も参加したが、その詳細は別の機会に譲る。）4) 公のプログラムによって、現在の出来事を含め、ホロコーストについての理解を深める。数多くのプログラムの中で、9月にホロコーストの犠牲者の一グループであるジブシーについてシンポジウムが催され、連邦政府の人権教育関係者、VOA（Voice of America）からの質問もなされていたのは印象的であった。前者はこのようなシンポジウムを歓迎するとのコメントと共にそれが今後どのように具体的に博物館で反映されてゆくのかという質問を行った。また“First Person”というホロコーストの生存者の証言が毎水曜日の午後、一般に公開された。最

後にストックホルム宣言でも触れられた“Holocaust Remembrance Day”が憲章化されている。ホロコーストの犠牲者を記憶し、専制、憎しみ、無関心が支配するとき「文明人」の身にも生じうるものとしてアメリカ人にホロコーストを考えさせるというのがその趣旨である。1980年に設立されたホロコースト・メモリアル・カウンシルがその全体の責任を有している。その日時はすでに2000年から2010年まで決定済である。

連邦政府のホロコースト教育への関心は1986年の5月6日に開かれた公聴会“Expressing the Sense of Congress That Public Schools Should Be Encouraged to Include A Study of the Holocaust in Their History Curriculums”にも見られる。¹⁴⁾これは公立学校の歴史のカリキュラムにホロコースト教育を取り入れることについてカリフォルニア議会の代表バートン氏 Hon. Burton, 合衆国ホロコースト・メモリアルカウンシル, また“The Courage to Care”のプロデューサーでもあるリトナー女史 C. Rittner, 同じくカウンシルの副議長タリスマン氏 M. Talisman を招いて開かれたものである。ポーランド出身で生存者でもある Burton 氏はホロコーストが彼女自身の歴史を断絶させ、一方では政治的、社会的意識を形成し、人民と政府とのもろい関係についての意識を尖鋭化したと述べ、アメリカ人の歴史意識の抽象性を指摘する。ニューヨーク、ニュージャージー州を除いて歴史の教科書におけるホロコーストの扱いは表面的であり“Final Solution”が人種差別と不寛容との頂点であるという事実が無視されていると批判しつつ、アメリカで歴史を教える方法を改良することによって、生徒は歴史を形づくる出来事が諸々の人間の行動によって誘発されるという事実を認識しうようになると論ずる。次にタリスマン氏は「忘却」と戦うことほど大きなチャレンジはないと自らの見解をヴィーゼルを引用しつつ述べ、合衆国におけるホロコーストについての教育の重要性を主張する。

リトナー女史は教育の最も高貴な使命は生徒が、寛容な、人を尊重する、より豊かな人間になる手助けをすることだと教育の目的を述べ、以下ホロコーストについての自説を展開するのであるが、その中でホロコースト当時のクリチャンの責任について言及しつつも、自らの命を危険にさらしながら迫害された人々を救った人々の持つ意義を指摘し、「人間であることはあやうい立場におかれたひとびとを気づかい、行動し、助けること」であること、「救いに至る道は記憶である」をいう言葉で証言をしめくくっている。以下ジェノサイドについても論じられるがホロコーストを除いてジェノサイドは論じられないという主張と共に、ホロコースト教育の必要性の根拠の一つとして、40名の歴史上の人物のイラストを見せられた生徒のうち39%がヒトラーをロック・スターだと答えたという報告がタリスマン氏によってなされている。

IV

筆者が Mandel Institute に参加して入手した資料によれば現在ホロコースト教育を“mandate”化しているのは4州、即ちフロリダ、イリノイ、ニュー・ジャージー、ニュー・ヨークである。またホロコースト教育を“encourage”又は“recommend”している州はカリフォルニア、コネチカット、ジョージア、インディアナ、マサチューセッツ、ノース・カロライナ、オハイオ、ペンシルヴェニア、サウスカロライナ、ヴァージニア、ワシントンの11州である。ホロコースト教育が義務化されている4州のうちカリキュラムが作成されているのはイリノイを除く3州であるがその資料は例えばフロリダの例をとれば電話帳ほどの厚瀚な物である。ホロコースト教育を「推奨」している11州のうちガイドラインが作成されていない州はインディアナ、ヴァージニア、ワシントンである。ホロコーストが授業に取り入れられているそのコンテキストはアラバマではアメリカの第2次大戦への参加という背景において、ミシガンでは grades 5-12の学生がアメリカ史の中の第2次大戦という背景においてというように歴史も多いがEnglishの授業においてもホロコーストの作品が多く読まれている。

以上挙げた諸州のうち早くからホロコースト教育にとりくんできたニュー・ジャージー州とホロコースト教育を推奨している州の一つオハイオ州ホロコースト教育カウンスルが1987年に州知事に提出した「最終報告」を管見してみる¹⁵⁾。

ニュージャージーの取り組みは1976年ホロコーストカリキュラムガイドを Teaneck 及び Vineland で作成したことに始まる。同地区においてアメリカ史、世界史のユニットでホロコースト教育を取り入れることが必須となるのは同年である。1978年ニュージャージー州教育局が上の2地区の生活にカリキュラム作成を援助し、その結果、作成されたのが“The Holocaust and Genocide: A Search for Conscience”であり、筆者はR. Haim, H. Furman, K. Tubertini (Vineland地区)、及びE. Reynold J. Chupck (Jeanck地区)の諸氏である。この試みに対し反ユダヤ的な郵便も届いたとJ. Sexton (ニュージャージー州議会)は報告している。このカリキュラムは最終的にはニューヨークの Anti-Defamation League で出版された。ホロコーストの他にアルメニア、カンボジアのジェノサイドもとりあげられている。総数1,500名の教師がこの二地区の教師による教育を受けオランダ政府は子供の教育のためこの教材を翻訳した。そして1982年州知事 T. Kean がホロコースト教育ニュージャージーアドヴァイザリー・カウンスル設立条項を批准し、合衆国でこれを行った最初の州となったと Kean 氏は誇らしげに述べている。カウンスルのメンバーは生存者、第2世代、レジスタンスのメンバー、歴史家、大学教授、医師、弁護士、大学総長、アルメニア人、クリスチャン、ポーランドの生存者、教師である。

次にオハイオホロコースト教育カウンスルが州知事に提出した最終報告を見てみよう。序で平和な社会建設のためホロコーストから生徒が教訓を学ぶ手助けをすることがカウンスル設立の大目的であると説明され、カウンスルの構成者(宗教)指導者、教育者、コミュニティーのリーダー、政

治家、生存者、解放者 (liberator) が示されている。報告の中で興味深いのは調査報告である。

1) ホロコースト教育がどの科目でなされているかとの問いに対し, a) アメリカ史78, 世界史71, 英語27, その他22校区。2) どの学年でホロコースト教育がとりいれられているかに対し, b) 10-12が89, 7-9が57, 4-6が14地区, その他。3) 各校区におけるホロコースト教育の方法については, c) 教科の一部が50, 様々なレベルと／又は様々な教科との組合せが35, 少なくともある科目で1ユニットを3日間教える校区29, 4) ホロコースト教育のためにどのような resources を用いているかとの問いに対し, d) 教科書55, 視聴覚器材54, その他の教材48, (ゲスト) スピーカーが21校区。5) もしホロコーストが教えられていない, あるいはほとんど教えられていないとすればその理由は何かとの問いに対し, e) ユダヤ人が全く, あるいは少数しかいない31, その他の内容が優先されている31, 時間がない19, ホロコーストは教育されている19, resources が少ない校区12等。6) 各校区でホロコースト教育の在り方についての問いに対し, f) ホロコースト教育はホロコーストの授業と共に他の悲劇出来事を含むべき68, ホロコースト教育は様々な人々に対してなされたナチの蛮行として教授さるべき16校区, ホロコーストは教えるべきでない5校区となっている。7) 尚, 各校区におけるユダヤ人の比率を知るためのデータは収集出来なかったと但し書きがついている。

調査結果の分析が示すものは全体的には数多くの教室でホロコースト教育がなされていること, ホロコースト教育に対する反対は少ないものの, テーマの重要性に充分納得しているように見えない反応が多いことが挙げられる。このため一定のグループというよりすべての人々にかかわりがあるものとしてホロコースト教育の重要性を具体化することが必要だと説明されている。以下, 6項目にわたって分析がなされている。1) ホロコースト教育はオハイオの様々な地区で行われていること。大半は社会 (social studies) で教えられているが英語 (恐らくはアンネ・フランクとの関わり) その他のクラスでも教えられている。2) 大多数は高等学校で教えられている。中学校でこの科目を教えている所は少なく, 小学校ではホロコースト教育の比率はさらに減少する。4年生以下のホロコースト教育は存在しない。3) ホロコースト教育は別の教科の一部としてなされているケースが最も多い。(第二次大戦)。しかし3日間あるいはそれ以上にわたってホロコーストだけのユニットを扱っている学校も多く存在する。1人だけがホロコーストを “subject” として扱っていると答えた。4) スピーカーの不足, 疑問点のある第2次資料 (secondary materials), 教科書における限られたホロコーストの扱いなど改良すべき点が存在する。5) ホロコースト教育の時間が少ないと答えたものはそれを他の教科への時間が優先されること, ユダヤ人人口が少ないためだと考えている。他に訓練をつんだ教師の不足よりも不十分な教材が問題であると調査は暗示している。6) 大多数がホロコースト教育は他の歴史上の悲劇も扱うべきだと考えている。(ホロコーストの持つ) 「普遍性」への支持はホロコースト教育は様々な人々に対してなされたナチの残虐行為を含むべきであるという回答にもあらわれている。

この調査は1987年になされたものであるがその後, 合衆国ホロコースト記念博物館が設立され,

多くの教授資料、教育方法等を提供し、教師の研修のためのプログラムもその他の場所でも提供されているので教材の不足ということは今日では考えられない。以下ホロコースト教育の意味、可能性、限界について諸氏の見解を見てみよう。

トッテン Samel Totten とファインバーグ Stephen Feinberg はアメリカのホロコースト教育についての著書 *Teaching and Studying the Holocaust* でホロコースト教育の必要性、根拠についてドルー Margaret Drew の「もしジェノサイド研究が同時に人間性、非人間性の研究でなければ、もしそれが人間行動の理解に益することがなければ、それは何の目的でカリキュラムにくみ込まれるのであろう」を引用し、17項目にわたってホロコースト教育の根拠を上げている。そのうちいくつかを列挙してみよう。¹⁶⁾

◎ 人間の行動の理解。

◎ 「最終解決」にいたるまでの主要な歴史的プロセスを含めホロコーストがなぜ、どのように、なにが、どこでおこったかを生徒におしえること。

◎ 偏見、差別、ステロタイプ化、人種差別、反ユダヤ主義、権威への服従、傍観者症候群、忠誠、争い、争いの解決、決断、正義などの概念を追求すること。

◎ 小さな偏見が深刻な偏見に発展しうることに基づくこと。

◎ 権利の乱用、市民権、人権の迫害、ジェノサイドを含め、生活が産業／テクノロジー／情報化の時代にあって、個人、集団、国家の役割と責任について考えること。

◎ 政府の性質、構造、目的を調べること。

◎ 抑圧下での沈黙と無関心の危険性を具体的文脈のなかで考えること。

◎ ホロコーストが偶然ではないこと、それが不可避ではなかったことを理解すること。

あげられた項目はすべて重要なものであるがホロコーストの提起する問題が深刻で多岐にわたっており、その広範な歴史を包括的に、しかも具体的に正確にとらえ、それが倫理関心に支えられたものでなければならないことを考えたとき多くのものがその前にひるんでしまうことは考えられないことではない。アメリカのホロコースト教育はまだ長い歴史をもたず、Facing History and Ourselves のような例はあるにせよ、それがどのような成果をもたらしているかはまだ十分に検証されているとはいいがたい。

次に本書に序論をよせたロスがホロコースト教育の可能性と限界を考えたとき言及の必要があるとする三人の著作について管見する。ホロコースト教育の意味、可能性、限界を考えるにあたってロス John Roth が引き合いにだすのはデルボ Charlotte Delbo の *Auschwitz and After*、ランガー Lawrence Langer の *Preempting the Holocaust*、ノヴィック Peter Novick の *The Holocaust in American Life* である。¹⁷⁾

デルボはアウシュビッツで得た知識を「無益な知識」と呼ぶ。それまで日常社会で獲得した知識、

常識はアウシュヴィッツでは通用しない。アウシュヴィッツの世界では「ここに何故はない」のであり日常の世界にもどったデルポにとってアウシュヴィッツで刻印された知識は無益であり、いままで学んだすべてを彼女は“unlearn”しなければならなかった。ロスは無益な知識がホロコースト教育において教訓になりうるかをここで問うている。ここで想起させられるのはアウシュヴィッツの生存者プリモ・レヴィーが「無益な暴力」という言葉で形容したナチの行為である。¹⁷⁾90歳を超えた瀕死の老人は放っておけば死はまじかであるにもかかわらずわざわざベッドからひきずりだされ、貨車に積み込まれる。死のまじかな老人たちになぜこれほどの無駄と思える時間と労力を費やさなければならなかったのかというのがレヴィーの疑問である。レヴィーの答えはユダヤ人の死は人間的な死であってはならない。徹底的な人間性の否定、尊厳の破壊、苦しみを極限まで味あわせることこそが本来の目的である。ユダヤ人は人間であることを許されなかった。生きることを許されなかった。人間として死ぬこともゆるされなかった。ユダヤ人は破壊されねばならなかった。

ロスの友人ランガーは最近のホロコーストの普遍化への傾斜をあらわす著者三名(トドロフ Tzvetan Todorov, シカゴ Judy Chicago, ベック Frans Josef van Beeck)を“Preempting the Holocaust”のなかであげホロコーストのなかに従来の道徳、共同体、信仰体系にもとづいた救いを見いだそうとする態度を批判する。母親から赤ん坊を渡すことを拒絶されたSSは母親から赤ん坊を奪い取るとその両足首をつかみ母親の前で二つに引き裂いた。ランガーの問いはホロコーストにおいて例外でなかったこのような行為からいかなる教訓や意味が見いだせるというのであろうかということである。おそらくできることは従来の哲学、価値体系を“preempt”した現実を受け入れることだけである。

ノヴィックはまず教授法 pedagogy の観点からホロコースト教育に疑念をもっているとロスは説明する。ホロコーストは破壊でありそこから引き出しうる教訓も意味もないという立場である。ノヴィックによればホロコーストという極限状態をわれわれが日常直面している事柄の解決のための教訓の拠所とすることに疑念を表するのである。これは病人をあつかったフロイドがそれを健康な人を含めた人間一般にまで理論をふえんしたと批判する論法を想起させる。生存者プリモ・レヴィーはむしろ日常のささいな行為のなかにアウシュヴィッツに至る萌芽をみようとする。ノヴィックは日常からアウシュヴィッツを眺め、レヴィーはアウシュヴィッツから日常を見つめているのである。

ノヴィックがホロコースト教育にいだく疑念の第二点はプラクティカルなものである。彼はホロコーストのユニークさを強調することがホロコーストを特権化し、他のジェノサイド、蛮行の深刻さを軽視することにつながることを指摘する。しかもアメリカでのホロコースト教育はノヴィックによれば「費用がかからない」“cost-free”である。ホロコーストはヨーロッパで生じた出来事であるがゆえに、アメリカでのホロコースト教育は痛みを伴うことが少ないと言う含意であろうか。この指摘は重要であるがそれではホロコーストについて全く無知のままでいいのかという反論が生じてくるであろう。ジェノサイドの犠牲者に苦しみのランクづけを行うことなく両者を比較するこ

とは可能であるとおもわれる。ホロコーストはジェノサイドであったが全てのジェノサイドがホロコーストとはいいがたい。ホロコーストについて学ぶことが過去、現在のジェノサイド、暴力、社会悪への意識をより鋭敏にし、他者への尊敬、個人の自立と責任を養うことにつながらなければならない。ヴィーゼルの言葉を用いればホロコーストについて学ぶことがそのひとの人生を変えるような体験 "life-changing experience" でなければならないのであり、希望がなければ希望を、未来がなければ未来をつくりだす責任が一人一人の人間に存在する。またホロコーストについて学ぶことがアメリカ人に奴隷制、ネイティブ・アメリカン、原爆投下への意識を鋭敏にし、ホロコーストの時期のアメリカ政府の態度に対する反省を促すことは可能である。順序が逆であるという議論がむしろ存在しアメリカ人はホロコースト博物館を建設する前に奴隷制、ネイティブ・アメリカンの博物館を建設すべきであったという立場がある。これは当然な議論であり、ホロコーストが自国への批判的考察を逃れるための方便となってはならない。この視点からアメリカにおけるホロコーストへの在り方にたいして辛辣な批判を展開したフィンケルスタインは「ベルリンにアメリカ奴隷制博物館あるいはアメリカインディアン殺戮の国立博物館があることをかりに想像して見るがよい」という。¹⁸⁾ この考えかたにはそれなりの説得力があり彼自身がホロコースト生存者の息子であることを考えたとき簡単に無視できない。ホロコースト博物館は連邦政府の設立による必要はなかったとも言えよう。ホロコーストが現実の場でなかったアメリカでのホロコーストはいきおい観念的、理念的にならざるを得ない。そして連邦政府によるホロコースト記念博物館が首都ワシントンに建設されたとき、抑圧された人々の避難場として、ホロコーストに対立するものとしてのアメリカの理念が賛美され、異国での異国の人々による犯罪がアメリカに自ら理想化された存在理由を想起させるという意味も担うにいたるのである。しかしまたヤングが述べるようにホロコースト博物館という公のスペースはさまざまな異なるグループを「記憶という場」に参加させ、他のグループの歴史という光のもとに自らの歴史を想起させ、それぞれのグループが自己の回想された過去の光のなかで同胞の経験を知るというアメリカのビジョンを提供もしているのである。¹⁹⁾ ホロコーストは他者の歴史を通して自己を、自己の歴史を想起させるレンズ、自己の歴史をとおして他者を理解するための契機となりつつある。

ホロコースト教育、とりわけ子供にたいしてなされるそれは双刃の剣であって、不用意に十分な知識なしに行われれば子供の人間性にたいする信頼の喪失を招き、世界はすべて敵であるという認識を植えつけかねない。ランズマンの映画「ショアー」にも登場するヤン・カルスキー Jan Karski は今年なくなったが彼はポーランドで二人の地下組織ユダヤ人指導者からポーランドにおけるユダヤ人の絶望的状况を連合国に知らせるよう依頼されルーズベルト、イーデンなどに会い、苦境を伝えた人物である。²⁰⁾ 案内を受け、ワルシャワゲットーとパウゼッツ絶滅収容所の様子を目撃した夜、彼は衝撃のあまり血を吐いた。彼自身ヨーロッパにいたとき捕らえられて拷問を受け自殺を図ったこともあるためホロコーストを教えることを依頼されたとき断った。ホロコースト教育を否定するわけではないが、彼はホロコースト教育、特に子供にたいしてもし教師が不用意であれ

ば子供、特にユダヤ人の子供に世界が敵であり、人間性に対する信頼喪失を生じさせる危険があると警告している。また、ホロコーストの生存者の家族がたえず犠牲者の死を悼むという「喪の状態」に閉じこめられ、負のアイデンティンにとりかこまれてしまうこと、ホロコーストを今日に至っても云々することはヒトラーの勝利を認めることになるのではないかという危機、ホロコーストの商業化を指摘する声もある。

ショーン Karen Shawn は不用意なホロコースト教育はホロコーストの軽視と歪曲につながることを指摘し、それは近年の劣悪なテキスト、教授資料、レッスン・プランの氾濫に現れていると批判する。結論として今日のホロコースト教育は無知、思い上がり、皮相さ、コマーシャリズムによって脅かされていると彼女はのべている。ホロコースト教育の可能性についてさまざまな議論があるにせよ、ホロコーストはおよそ人間が人間になした行為であり、人間をつきつめて考えるとき、ホロコースト、ジェノサイド、戦争のつきつける問題を避けることは許されない。

アウシュヴィッツのあとに教えることはアウシュヴィッツに抗して教えることであるとフォルジュは述べている。²¹⁾ アウシュヴィッツを教えることは「不可能」ではあるが、それにもかかわらずそれは行われねばならないのである。

次に大学でホロコースト教育がどのようになされているかを管見する。S. Hanyes の行った調査がここでは有益である。²²⁾ この調査で Hanyes は大学で今日、ホロコーストをコースとして教えている人々はその実践のために正式な訓練は受けていなかったこと、このためホロコースト教育に対するパースペクティブも方法論も一貫した哲学によって統合されていないことを現状としてあげ、次に1980年ころまでホロコーストのコースが存在しなかったこと、その後爆発的に増加したホロコーストのコースは何によるものか、そのニュアンスは未だ明確でないと説明する。興味深いことは一般大学のホロコーストへの関心の高まりは一般のホロコーストへの関心への反応 (response) と結論できると Hanyes は見ていることである。アメリカの大学におけるホロコースト教育について包括的な調査はなされておらずアメリカの大学で開かれるホロコーストのコースの数は700だという学者もいれば140だという学者も存在する。合衆国ホロコースト記念博物館が着手した包括的調査の結果をまたなければ正確な数は不明確である。

Hanyes がどのようにしてホロコースト教育を担当する人々を見出したかといえ、1) ホロコースト学会参加者のリスト、インターネット、ホロコースト関係諸組織である。こうして236名の人物を選び出し、アンケートを行った結果をまとめたものが“Holocaust Education at American Colleges and Universities”である。残念ながらすべてに回答して戻ってきたのは90名にすぎない。しかしながら、この種の調査として、きわめて数少ない調査なので高等教育機関におけるホロコースト教育の現状の一部を知る手がかりの一つとして有益である。

実践

49.4%が公立大学で教えている。私立の大学は（4年制26.5%，コレッジ24.1%）である。分野は歴史が50%強，宗教・哲学10名，言語，文学それぞれ10%弱，政治学5%である。また Judaic Studies もこの中に入っている。次にこの調査が示すものとしてフルタイムの正規の教官が担当していることが挙げられている（教授52%，助教授18%，準教授11%等）。その開講日数は年に一度が48%，年2度が28%，不規則10%である。クラスのサイズは10～130名，出席している学生数の平均は37名である。授業科目は選択科目として教えられている大学が多い。必修となっているのは14%である。興味深いのはホロコーストを授業で担当している者の88%が自らの関心 teacher's interest のもとに授業を行い，大学の宗教的，道徳的要請によるものは12名という事実である。

方法，教材

クラスの活動のうち講義が100%，討議98%，ビデオ93%，ゲスト52%，インタビュー18%，フィールド・トリップ5%となっている。ゲストのうち大半はホロコーストの生存者である。筆者の聴講している二つのホロコーストのクラス（いずれもヨーロッパ史の中の，第二次大戦というコンテキストの中で扱われている）も2名のゲスト（それぞれキャンプの解放者，アメリカの研究者）を招き，また別のコレッジでは2名のゲスト（1名はDPキャンプで生まれた2世，もう1名はドイツ人の両親を持つ2世）さらにもう1名の生存者が授業を聴講していた（前者はヴァーモント大学，後者はバーリントン・コレッジ）。シュルマン Shulman 氏がストックホルムのフォーラムで述べているようにホロコーストの生存者がいなくなったとき生じる空白を危惧する声も多い。クラスでの生存者の持つ意味，証言の重さは何にもかえがたいからである。

授業の教材として上位を占めるのはヴィーゼルの『夜』（41%），レヴィ『アウシュヴィッツでの生存』（28%）ブラウニング『普通の人々』（21名），パウアー『ホロコーストの歴史』（18名），ダヴィトウィチの『ユダヤ人に対する戦争』（15%），スピーゲルマン『マウスⅠ』（16名），ボロウスキー『紳士，淑女の皆様，ガス室はこちらです』（12名），ヒルバーク『ヨーロッパユダヤ人の絶滅』（11%）等となっている。スピーゲルマンの作品がⅠ，Ⅱを合わせ25%を占めているのは注目すべき点である。

他の“reading”として挙げられている諸作品は Nomberg-Pizytk の『アウシュヴィッツ・グロテスクな土地の真実の物語』Auschwitz: True Tales from a Grotesque Land（8%），ヴィーゼンサル『ひまわり』（8%），マラス『ナチ・ホロコースト』（7%），アンネ・フランク『日記』，その他ルーベンスタイン，デ・プレ，セレーニー，ヤーヒル，レヴィ，アーレント，ワイマン等の著作が（それぞれ5%）挙げられている。

ビデオ教材はランズマン『ショアー』（26%），『夜と霧』（25%），『ジェノサイド』（18%），『意志の勝利』（14%），『ヴァンゼー会議』（12%），『シンドラーのリスト』（8.5%），『ヨーロッパ，ヨーロッパ』（8.5%），『魂の武器』（8%），『ウーチ・ゲットー』（8%）となっている。

その他のビデオ教材は順に『思いやる勇気』（6%），『ワルシャワ・ゲットー』（6%），『ぎまん

と無関心』(6%),『いちばん長い憎しみ』(6%),『Panticans up Vilne』『さようなら,子供達』,スライド(すべて5%)となっている。

本論は渡米中にしたため,帰国後に若干の手を加えた単なるスケッチにすぎないが,作成にあたっては渡米の機会及び研究の場所を与えて下さった方々に感謝する。日米教育委員会,合衆国ホロコースト博物館の W. Fisher 博士, J. Leffler 氏,教育部門の S. Feinberg 氏,また,ヴァーモント大学の J. Huener 氏, Bayley / Howe Library の M. May 女史に感謝する。文責はむろんすべて筆者にある。

注

- 1) The Stockholm International Forum on the Holocaust についての資料は <http://www.holocaustforum.gov.se> で入手可能である。
- 2) Scholar's Conference on the Holocaust and the Churches. 2001年は3月3-6日にフィラデルフィアの聖ヨゼフ大学で開催される。
- 3) James Young, *The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning* (New Haven & London, 1993) p. 336.
- 4) Peter Hayes ed., *Lessons and Legacies III: Memory and Memorialization and Denial* (Evanston: Northwestern University Press, 1999), p. 17. Gay Block and Malka Drucker eds., *Rescuers: Portraits of Moral Courage in the Holocaust* (New York: Holmes & Meier, 1992)
- 5) William L. Shulmen ed., *Association of Holocaust Organizations: Directory* (New York: Holocaust Resource Center and Archives, 2000)
- 6) Geoffrey Short, Carrie Supple, Katherine Klinger eds., *The Holocaust in the School Curriculum: A European Perspective* (Strasbourg: Council of Europe, 1998)
- 7) Deborah E. Lipstadt, "America and the Memory of the Holocaust, 1950-1965", *Modern Judaism* C16.3 (1996), pp.195-214. Peter Novick, *The Holocaust in American Life* (Boston & New York: Houghton Mifflin Company, 1999)
- 8) Novick, p. 83.
- 9) Norman G. Finkelstein, *The Holocaust Industry: Reflections on the Exploitation of Jewish Suffering* (London: Verso, 2000), p. 16.
- 10) Novick, p. 203.
- 11) Novick, p. 281.
- 12) 博物館の websites 参照。 <http://www.ushmm.org>
- 13) "Expressing the Sense of Congress that Public Schools Should Be Encouraged to Include a Study of the Holocaust in Their History Class: Hearing" (Washington, D.C. US Congress Printing Office, 1986), H. Con. Res 121 Serial No. 99-96
Mandel Institute に参加したとき Feinberg 氏によって配付された資料。同氏はストックホルムのフォーラムでもアメリカのホロコースト教育についての発表を行っている。
- 14) 資料最終ページ (pp. 13-14.) に Hon. J. Saxton 氏により, 公聴会のために準備されたニュー・ジャージーの取り組みの要約がある "Final Report to the Governor from Ohio Council on Holocaust Education" (December, 1987)
- 15) Samuel Totten and Stephen Feinberg eds., *Teaching and Studying the Holocaust* (Boston: Allyn and Bacon, 2001), p. 5.
- 16) Totten and Feinberg eds., xii.; Charlte Delbo, *Auschwitz and After* trans. Rosette C. Lamont (New Haven & London, 1995); Lawrence Langer, *Preempting the Holocaust* (New Haven : Yale University Press, 1998), pp. 1-22.
- 17) Primo Levi, *The Drowned and Saved* trans. Raymond Risenthal (New York : Vintage International,

- 1989) See Chapter 5.
- 18) Finkelstein, p. 72.
- 19) Young, p. 337.
- 20) Block and Drucker eds., pp. 170-175.
- 21) ジャン・F・フォルジュ『21世紀の子供たちにアウシュヴィッツをどう教えるか』高橋武智訳（作品社，2000）
- 22) Stephen R. Haynes, "Holocaust Education at American Colleges and Universities: A Report on the Current Situation," *Holocaust and Genocide Studies*, V12 N2, (Fall, 1998), pp. 282-307. ホロコースト教育に関する資料は膨大な量にのぼるが evaluation については数は多くはない。Facing History and Ourselves 等についても，次稿で触れることにする。

ホロコースト関係の文献は膨大な量にのぼり，いまもそれは増えつづけている。ここで挙げる30冊ほどの文献はその一部にすぎない。なお注でふれたものは省いた。

参考文献

- Appelfeld, Aharon. *Badenheim, 1939*. New York:Pocket Books, 1981.
- Bauer, *The Holocaust in Historical Perspective*. Seattle:University of Washington Press, 1978.
- Berenbaum, Micahel. *The World Must Know:A History of the Holocaust as Told in the United Staes Holocaust Museum*. Boston: Little Brown, 1993.
- Borowski, Tadeusz. *This way for the Gas, Ladies and Gentlemen*. New York:Viking Penguin, 1992.
- Browning, Christopher. *Ordinary Men:Reserve Battlion 101 and the Final Solution in Poland*. New York : Cambridge Universty Press, 1995.
- Dawidowicz, Lucy. *A Holocaust Reader*. West Orage, NJ:Behrman House, 1976.
- Des Pres, Terence. *The Survivor:An Anatomy of life in the Death Camps*. New York:Oxford Universty Press, 1976.
- Donat, Alexander. *The Holocaust Kingdom*. New York:Anti-Defamation League, 1963.
- Dwork, Deborah. *Children with a Star:Jewish Youth in the Nazi Europe*. New Haven, CT:Yale Universty Press, 1991.
- Eliach, Yaffa. *Hasidic Tales of the Holocaust*. New York:Vintage Books, 1988.
- Fine, Melinda. *Habits of Mind : Struggle Over Valus in America's Classrooms*. San Francisco: JosseyBass Publishers, 1995.
- Gilbert, Martin. *The Dent Atlas of the Holocaust*. London:A.P. Watt Limited, 1988.
- Hilberg, Raul. *The Destruction of the European Jews*. New York:Holmes and Meier, 1985.

- Lang, Berel. *Act and Idea in the Nazi Genocide*. Chicago:The University of chicago Press, 1990
- Langer, Lawrence. *Holocaust Testimonies:The Ruins of Memory*. New Haven, CT:Yale Univeristy Press, 1991.
- Lanzmann, Calude. *Shoah:An Oral History of the Holocaust*. New York:Pantheon, 1987.
- LaCapra, Dominick. *History and Memory after Auschwitz*. New York, Ithaka : Cornell Univeristy Press 1998.
- Lifton, Robert. *The Nazi Doctors:Medical Killings and the Psychology of Genocide*. New York: Basic Books, 1998.
- Lipstadt, Deborah. *Denying the Holocaust:The Growing Assault on Truth and Memory*. New York: The Free Press, 1993.
- Marrus, Michael. *The Holocaust in History*. New York:New American Library:Dutton, 1989.
- Ozick Cynthia. *The Shawl*. New York:Random House, 1990.
- Schwartz-Bart, Andre. *The Last of the Just*. Cambridge, MA:Robert Bentley, 1981.
- Sereney, Gitta. *Into That Darkness*. New York:Random House, 1983.
- Spiegelman, Art. *Maus*. New York:Pantheon, 1991.
- Tec, Nechama. *When Light Pierced Darkness:Christian Rescue of Jews in the Nazi-Oaccupied Polad*. New York:Oxford Univeristy Press, 1987.
- Wiesel, Elie. *Memoirs:All Rivers Run to the Sea*. New York:Schoken Books, 1995.
- Wyman, David. *The Abandonment of the Jews*. New York:Pantheon, 1986.
- Young, James. *At Memory's Edge:After-Images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture*. New Haven and London:Yale University Press, 2000